

THE HUNTER

written by HADEYA

1

「はあ……はあ……」

上腕からの出血が酷い。腕はプランと垂れており、筋肉に力が入らない。逃げねばならない。連中が……再び襲い掛かって来る筈だ。

森の奥。もはや見ている神もない。

シューウ！ という風切り音と共に木の枝が襲い掛かった。痛烈な攻撃を何とか回避して張本明宏——俺は走った。青木ヶ原の樹海を。脇目も降らず、逃げて行く。連中から。木から逃れる為に。

一体、俺はここで何をしているのか。事の発端は昨晚——

2

「それがさ——」

妻——張本優子は晩ご飯を食べながら俺の話を聞いている。さりとして興味がなさそうに。食卓での会話が続いた。

「今週末の勤務、する事がないんだ」

「じゃあ、何で入社するの？」

「分からん。思い当たる事は——」

手段。大企業が問題社員を自主退職に追い込む常套手段が脳裏を掠める。事実、今週末の出勤は意味が分からない。ルート先がないのに週末に会社など明らかに可笑的。俺の持論に対し、妻は「考え過ぎよ」と答えた。

……妻はいつだって支えてくれる。妻は俺にとって天使のような存在だ。光り輝く心を持った、汚れなき天使。

「辞職になったら転職先はどうしよう」

「だから考え過ぎだつてば」

「……だよな？」

「そう、考え過ぎ。それって明ちゃんの昔から変わらない悪い癖だと思う。マイナス思考って。プラス思考に変えなきゃ。プラスに考えれば、小城さんは明ちゃんを見込んでくれているのかも知れない」

自嘲の笑みが零れた。俺が評価された事など人生で一度もないからだ。俺を評価してくれるのは世界でたった一人。優子だけ、だ。

シャワーを浴びた。晩酌しながらテレビを見て、床に就く。

「お休みなさい」

「お休み」

リモコンで室内の照明を落とした。目を閉じ、寝に入った。

……見ての通り、順風満帆な生活を俺は送っている。

歯車が狂ったのは、その晩の事だった。

3

目を開けた。悪夢を見た。どんな夢かは思い出せない。が、恐ろしい夢だった。時刻を確かめようとする身体が動かなかった。全く上半身が動かない。感覚もないし、声も出せない。麻痺を疑う。しかし睡眠中に上半身が麻痺するなど聞いた事がない。何かが可笑しい。

.....そこから先は思い出せない。気付けば、俺は自動車を運転していた。気付けば、ルート先に玄関マットを届けていた。気付けば、俺は——

4

親から貰った大切な命！もう一度、考え直せ！

看板にそう書かれているのは自動車の中からでも読む事が出来た。

寒い。真冬の森の風は堪える。青木ヶ原の樹海の森の風は特に。ここには普通の森にはない<何か>がある。それが何かは分からないが。

「この辺で良いだろう」

呟きながら自動車を路肩に停める。砂利道に。

自動車から降り、樹海を見上げた。最後の食事に俺は<鮭握り>を選んだ。シュリンクを破き、お握りを頬張る。食欲は失せていない。俺自身が失せているのだ。この世界から。

自殺——その為に俺は遠路遙々、東京からやって来たのだ。

5

太い木の根元で腰を降ろした。ここまで歩けば、捜索の手も及ばないだろう。

本当は俺はここで死ぬ筈だった。ところが死ねなくなる。木が襲い掛かって来.....樹海が襲い掛かって来たからだ。自嘲しながら独り言を呟く。

「どいつもこいつも分かっちゃあいない。人生とはいつか枯渇するモノだ。必ず絶対に間違いなく枯渇する運命にある」

ブツブツ独り言を続ける。なお続けた。その時、背後の太い樹木が動くのを感じた。見る——つんのめりながら。どこからともなく声が聴こえる。生気のない死者のような声音が。思わず叫んだ。無駄だった。叫んだところで人生はどうにもならない。どうにもならないモノはどうにもならないのだ。

そんな訳で俺はここにやって来た。樹海の奥地へ。しかし木々の襲撃を受け、走って逃げているという訳だ。

6

動機1:住宅ローン。再就職の面接を26社、連続で落ちる。

動機2. 様々な不幸に起因する枯渇。生きる事への拒絶。もしかしたら俺は.....植物人間になったのか? なった事に気付いていないだけかも知れない。

生きる事への拒絶こそが人間の主たる人間の自殺要因であり、同時に植物人間のメカニズムなのだ。

7

動機3:路地裏での出来事。信号が青になった為、いつもとは違う道を進んでしまった。これが間違いだった。俺は道に迷ってしまった。のみならず、細い路地で自動車が壁に挟まってしまった。どうやったら、こんな角度になるのか。前進してもバックしても移動できない。

スマートフォンが着信した。メールを見る。またしても結果は落社だった。

泣いた。夜の路地裏で自動車の中で独り泣いた。頑張れ、言い続けた自分。ここが.....俺の限界、だ。

ギブアップしよう。樹海へ行き、ひっそり人生を終えよう。涙を拭い、俺は意を決した。俺の意は固かった。

*

「はあ.....はあ.....」

シュウウ! という風切り音と共に木の枝が襲い掛かった。痛烈な攻撃を何とか回避し、走る。青木ヶ原の樹海を。脇目も降らず、逃げて行く。連中から.....木から逃れる為に。

今、俺は植物からの〈テスト〉を受けている。生きるか死ぬかの選択を迫られている。

シュウウ! という風切り音と共に周囲の木々が襲い掛かる。凍て付く寒さの夜の樹海。俺は生存本能から生きる事を再決心していた——

連中に.....もう一度、人生に立ち向かってやろう、と。

8

森から出た。出た、と言うより木々の少ない区域へ侵入したのだ。

そこには一台のスクール・バスが停車している。ハリウッド映画に出て来るような極普通の黄色いスクール・バスが。

ドアに接近する。自動でドアが開いた。運転手は紫色のカエルだった。カエル人間がバスの運転手だったのだ。カエル人間が首を曲げ、俺を見て言った。

「ご乗車ください」

「……え？」

「貴方を迎えに来たんです」

「……ど、どこに向かうんですか？」

「決まってるじゃないですか。人生、と言う名のバス停に。貴方はもう一回、乗車する決心をしたばかりじゃないですか」

「何故——」

カエル人間が溜息を吐く。白い吐息の。

「ゴチャゴチャ言わないで、乗って下さい」

9

バスに揺られ、車窓の風景を眺める。樹海の奥地の道なき道をバスは進んでいる。一体、このバスはどこに向かっているのだろう。一抹の疑問が頭を過る。その時だった。落雷の音がして、轟音と共にバスが大破したのは。俺の身は車外へ投げ出された。何が起きたか分からない。倒れながらバスから立ち昇る炎と煙が見えていた。そして煙の中から現れたのだ。深緑色のローブに身を包んだ——

大魔法使いイザベラ、が。

10

邪悪な顔。この上なく邪悪な顔をしていた……イザベラは。紫色のカエルがイザベラの隣に並び、木の枝をもぎって口にくわえ、火を点ける。どうも樹海の煙草のようだ。

イザベラが口を開いた。鬼の形相で。その声は冷酷ソノモノ。

「お前は侵入した。侵入してはならないエリアに」

「私は——」

「見たな？」

……何を見た、と言うのか。

「な、何を——」

「トボけても無駄だ。見たろう？」

紫色のカエルが言う。何の事か検討も付かない。イザベラが睨みながら訴える。その秘匿性について……〈スーパーエゴ〉について。

「偶然、辿り着いたんだろう。それは偶然ではなく、必然だ。今、お前がここにいるのも、お前の選択も、お前の未来も、全て必然だ」

「運命の肯定、でしょうね」

紫色のカエルが含み笑いを浮かべながら言った。だが、その目は笑っていない。

イザベラが続ける。

「お前は運命を受け入れた。運命に立ち向かう決心、覚悟を。生意気な奴。覚悟を試させて貰う」
言うなりイザベラが右手を上空に翳し、目の前の空を切った。風の魔法を唱えながら。

切り刻まれた。風に。血塗れになった。全身を真っ赤に染め。そこで意識が飛んだ。

……闇の中、声がある。最愛の妻の懐かしい声が———
あなたは完全に植物人間になったの。

11

気付けば、UFOの中にいた。不気味な宇宙人が立ったまま拘束された俺を囲んでいる。宇宙人の一人からカプセルを渡され、「飲め」と命令された。

普通なら飲まないだろう。しかし俺は一カ八かカプセルを飲んでみた。宇宙人は説明を始めた。カプセルは植物人間の特効薬であり、植物人間の要因は生きる事への拒絶であるとの事だった。

「そこで問題だ」

宇宙人———グレイの一人が言った。ギョロリとした目で俺を見ながら。

「我々は頭の良い人物と会話がしたい」

セミの画像を見せられた。3301、と数字が記述されている。

「これはヘッドハントだ。この画像を見て、何を想う？」

「わ、私は……」

俺が思ったのはセミは長きに渡り、地中にある事。決して脱出時期を間違わない。つまり騙されないと言う事。だとすれば、答えは……生態系。

グレイの動揺が感じ取れた。グレイはこうも考えている———こいつを消せ、と。

淡々と俺は答えた。

「覚悟は出来ている」

「……何の覚悟が？」

俺は彼らのギョロリとした目を直視した。その目が血走っているのが分かる。

「第二の人生を送る覚悟が、だ」

レーザー銃を向けられた。トリガーのような突起物に触れ、グレイは尋ねた。

「第二の人生で何をやる？」

俺の口調は確かだった。

「お前らを倒す」

超能力で連中の脳味噌を一斉に吹っ飛ばした。無彩色の返り血を浴び、付着した緑色の血液をペロリと舐めた。

キネシスで拘束を解く。

倒れた一人のグレイに接近した。俺は尋ねた。

「今は何年だ？」

「……3300年。間もなく、3301年になる」

グレイの腹部を蹴り上げた。

「うぐっっ！」

「何故、俺を選んだ……答えろ！ 何故、俺を選んだ！！！」

抑えられない……自分の感情を……自分の欲望を。その時、警報が鳴った。蹴られたグレイが俺を睨み付けた。

グレイは告げた。宣戦布告を。

「手遅れ、だ……たった今、地球攻撃が始まった」

俺の鼻息は荒い。全身を未知のエネルギーが駆け巡っている。なお俺の感情は……爆発寸前だった。次の瞬間、俺は目からハイスピードのビームを放ち――

12

破壊する。UFOの内部を粉々に。キネシスが迸る。UFOの残骸が宙に浮き始める。俺は睨み付けていた。目の前にいる〈シケイダ3301〉を。

「貴方、止めて」

脳内で声がする。死別した妻の穢れなき美声が。

「そんな貴方……見たくない」

「俺は……俺は……」

そう俺は俺だ。俺であり、俺以上でも以下でもない。

俺は告げた。

「女子供は黙ってろ」

俺の目から青白いキネシスがスパークした。キネシスはUFOの内部を跡形もなく、粉碎した。(了)

キリミハデヤ

hadeyakirimi@gmail.com

81-080-9832-0574

モリカワケンタロウ 口座番号

三井住友銀行(店番号232) 普通口座 口座番号:7342872